

# さまざまな人が 集うカフェで地域を豊かに

■徳島県：社会福祉法人あさがお福祉会 つだまちキッチン

グラフ21

撮影 = 藤田政明  
取材・文 = 編集部





弁当のメニューは管理栄養士が考えており、おいしくて栄養バランスがよいと評判。総菜や手づくりのパン、スイーツもそろい、選ぶ楽しさがある

ユニフォームはロゴ入りのデザインTシャツ。カジュアルな雰囲気で利用者にとっても親しみやすい

社会福祉法人あさがお福祉会が運営する「つだまちキッチン」は、福祉施設であることを表看板とせず、誰もが気軽に利用できるカフェとして2015(平成27)年にスタートした。高齢者のデイサービスや放課後等デイサービスなどを併設する福祉拠点でもあり、開設の翌年には「徳島県版『ユニバーサルカフェ』認定制度」の第一号となった。高齢者、子育て家庭の親子、障害のある人など、さまざまな人が関わり展開する、新しい福祉の取り組みを紹介する。

グラフ21



「つだまちキッチン」が建つのはスーパーの跡地。付近には会社や銀行もあり利便性が高い場所でもある。誰もが利用したいと思う施設にするため、外観はカフェチェーンを意識したデザインに。パッケージにもこだわったオリジナルブレンドのコーヒーは、自家焙煎のコーヒー店にオーダーメードした自慢の味だ



高齢者のデイサービスの設備を地域交流イベントに利用する時は、さまざまな交流が生まれる



子どもと母親でにぎわうユニバーサルカフェ。月曜日から金曜日の10時から14時半までオープンしている



月に2回行っている子育て支援のイベント。この日は外部講師による「絵本クッキング」が開催され、未就学児の親子8組が参加した



食育に関するイベントは、デイサービスのキッチンを利用して行われている。隣で何をしているかわかる距離感だ



できあがったカップケーキをカフェで楽しむ親子。よくイベントに参加するという母親は「ここではおじいちゃん、おばあちゃんにかわいがってもらえるので、子どもたちもうれしいみたい」と話す



親子で一緒に卵を割り、小麦粉や砂糖とジッパー付きのボリ袋に入れて手でこねる。子どもが楽しく簡単に作業できるよう、工夫されている



カフェで夕飯の買い物を楽しむデイサービスの利用者。栄養バランスを考えて食事のアドバイスをしているのは機能訓練指導員の野林英実さん。出産のため仕事を辞めていたが、カフェの利用をきっかけにつだまちキッチンに就職。「働き始めた後に3人めの子どもを出産。上司が女性で相談しやすく、子どもがいても働きやすい環境です」



安全に道を渡れるよう、買い物に来た高齢者に付き添うカフェの職員。さまざまな人が集うことから、こうした細やかな気配りも大事な要素だ



母親が利用しやすいよう、カフェには授乳室やベビーベッドを備えた広々としたトイレもある。よく利用するという子どもと一緒に女性客は「子どもの世話をしやすくて助かります。キッズスペースで子ども同士遊んでくれるので、ママ同士でゆっくり話せるのがうれしいです」と話す



2019(令和元)年10月、つだまちキッチンの向かいに開設した児童発達支援事業所「つだまちスマイル・キッズ」。未就学児を対象として早期療育に取り組む



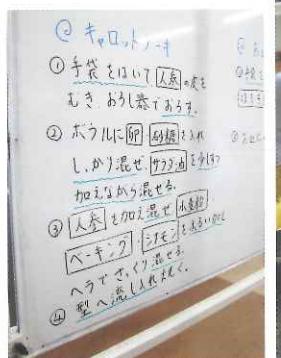
毎月27日に開催される子ども食堂には、毎回約30人の子どもたちが参加。子どもたちはカウンターへ順番に並び、自分でパンとおかずを選んで料理を受けとる。小さな子どもにとっては、自主性を学ぶよい機会になる



15時半から放課後等デイサービス「つだまちキッズ」がスタート。この日は、さまざまな分野で表現活動する芸術士(民間資格)のすぎやまあゆみさん(左)による蜜蠍を使ったキャンドルづくりが行われた

つだまちキッチンでは、女性が多く働いているのも特徴のひとつだ。ほとんどが子育て中の母親で、カフェの利用をきっかけに「働いてみたい」と志願した人も多いという。そのため、学校が長期休みの間は施設で子どもを預かるなど、母親が安心して働ける環境を整えている。さまざまな人が気兼ねなく集い、子育て世代の母親が無理なく働ける場を提供したつだまちキッチン。こうしたユニークな拠点が、地域をますます元気に豊かしていく。

高齢者のデイサービスでは、開所当時から料理を通じた機能訓練を実践している。みそ汁をつくる人、おかずをつくる人、料理を皿に盛り付ける人など、利用者の身体機能を考慮しながら作業を分担。車いすに座っていても調理しやすいよう、75cm、80cm、85cmと3段階の高さの調理台を用意している



作業療法士の介助を受けながら昼食を調理する利用者。調理にはさまざまな工程があるため、脳が活性化され認知症予防につながることが期待される

## 洗練されたカフェで、誰もが利用したくなる施設を

「福祉施設の看板を表に出せば、地域の人々が来にくくなるのではと考えました。逆にカフェなら、障害のある人や認知症の人も利用しやすく、周囲の人も気にしないはずです。まずは誰もが利用したいと思う場所をつくり、そのバックヤードで福祉のサービスを開拓することで、相談しやすい環境をつくりました」

計画にあたり地域でヒアリングを重ね、高齢者だけではなく、障害のある人や子育て中の母親への支援、住民が気軽に集える場が必要とわかった

「福祉施設の看板を表に出せば、地域の人々が来にくくなるのではと考えました。逆にカフェなら、障害のある人や認知症の人も利用しやすく、周囲の人も気にしないはずです。まずは誰もが利用したいと思う場所をつくり、そのバックヤードで福祉のサービスを開拓することで、相談しやすい環境をつくりました」

り、地域の声に応えるかたちでつだまちキッチンが誕生した。開設から5年めを迎え、親子のための料理教室や子ども食堂、介護予防も目的としたパソコン教室など、地域交流イベントを盛んに行っている。イベント時はデイルームとカフェエリアをフル活用。高齢者も、障害のある人も、子どもとその母親も、自由に行き交い、互いに話しかけ、自然な交流が生まれている。「特別なことはしません。多世代が互いの存在を認めながら思い思いに過ごす。どこにでもある当たり前の光景であればよいと思っています」と保岡さんは語る。

つだまちキッチンでは、女性が多く働いているのも特徴のひとつだ。ほとんどが子育て中の母親で、カフェの利用をきっかけに「働いてみたい」と志願した人も多いという。そのため、学校が長期休みの間は施設で子どもを預かるなど、母親が安心して働ける環境を整えている。さまざまな人が気兼ねなく集い、子育て世代の母親が無理なく働ける場を提供したつだまちキッチン。こうしたユニークな拠点が、地域をますます元気に豊かしていく。